ドキュメンタリーの＜都市＞へのまなざし

――『日本の素顔』に現れる東京と大阪――

法政大学大学院　丸山友美

1　目的

テレビ放送が開始され 60 年．日本におけるテレビ番組のアーカイブ化が始動した今，過去に立ち戻り，放送された番組を検証することが可能になった．この潮流は，番組にどのような人や場所が映し出され，どのような目的でいつ制作され，誰がどこで制作したのかといったメディア史・放送史の研究を推し進める．しかし，ドキュメンタリーを用いたこれら「歴史研究」は，ドキュメンタリー映像が「何を映してきたのか」その内容面に注目するあまり，「そもそもドキュメンタリーとは何か」という表現形式に対する問いに，十分な答えを与えることができずにきた．本研究は，日本初のテレビ・ドキュメンタリー番組である NHK『日本の素顔』のアーカイブを紐解き，ドキュメンタリーの＜都市＞へのまなざしに着目することで，ドキュメンタリーの価値と意義を再検討するものである．

2　方法

まず，NHK アーカイブス（埼玉県川口市）と NHK 大阪放送局（大阪府大阪市）に収集・保存されている『日本の素顔』の番組映像と台本を閲覧し，制作局や制作者名を反映させた番組目録を作成した．次に，制作局ごとに作られた番組数とテーマや取材対象の違いに注目し，視聴した番組の構成表を書き起こした．また，『日本の素顔』がどのように志向されたドキュメンタリー番組であったのか，制作者のインタビューや談話を収録した放送番組，執筆した記事や著書を参照し，制作当時の時代背景や政治経済的状況との結びつきから，テーマ選択や番組構成への影響を考察した．

3　結果

調査の結果，　1957 年から 1964 年までに放送された全 306 回は，3 つの時期に区分できることが分かった．『日本の素顔』はたびたび「客観的」ドキュメンタリーの模索と指摘されるが，主体としての制作者の存在をこれまで十分に検討してこなかった．この区分から制作者がいかに番組のなかに現れていたのかを考察した．特に，第 1 期から第 2 期，第 2 期から第 3 期の転換点に注目してみると，番組の編集構成が変化しており，構成者表記の有無の違いがあった．この転換点をきっかけに，東京局と大阪局が＜都市＞を描きだすために選択したテーマやその描き方に違いがあることがわかった．

4　結論

『日本の素顔』は，戦後復興で国民が思い描く高度経済へ突き進む日本の表層ではなく，貧困層の人々，宗教，公害といった隠蔽したい日本の深層を取り上げた．東京は，取材対象にロングショットや俯瞰アングルで迫る鳥瞰的な視座から，交通問題や食糧事情，風俗，安保闘争といった政治経済からこぼれ落ちる営みを＜都市＞として写した。一方大阪は，無名の制作者が自らの足で現場に入り込み，その顔をカメラの前にさらし取材対象者に話しかけ，小さな声に耳を傾ける虫瞰的な視座から描かれていた．人々の息づかいから浮かび上がる政治経済を＜都市＞として写した。この違いは，単に制作局の方針の違いによるものではなく，日々の社会の動きを敏感に捉え，社会現象を分析批判しすくいあげようとする時代の定点観測という動的なものもあれば，絶えず動く社会の中で生活を営む人間に焦点を合わせた静的なものを写すテレビ・ドキュメンタリーの模索であったといえよう．

文献

日本放送協会放送文化研究所編，2011，『放送メディア研究 8』丸善出版．